謝霊運の楽府「折楊柳行」二首其二について

沼口　勝

一

宋の郭茂倩『楽府詩集』第三十七巻・相和歌辞十二・瑟調曲二に、古辞・魏の文帝（曹丕）・晋の陸機の作に続いて宋の謝霊運（三八五～四三三）の「折楊柳行」二首が記録されている。第一首（「鬱鬱河邊樹」）は、その「負笮引文舟、飢渇常不飽」（11・12）の二句が『北堂書鈔』巻百三十八に収録の魏文帝曹丕の詩の「負笮引舡行、飢渇常不食」の句に似ており、また「舍我故鄉客、將適萬里道、妻妾牽衣袂、抆淚沾懷抱」（3～6）の四句にほぼ同じ句が、『初学記』巻十八に収録の曹丕の「見挽船士兄弟辭別詩」にあり、一詩全体の内容・格調が曹丕のそれにはなはだ近い点からも、曹丕の作であって霊運の作ではないだろうといわれている。[1] だとすれば現存する霊運の「折楊柳行」としては、次に掲げる第二首のみということになる。以下これについて若干の検討を加えたい。

騷屑出穴風　　騷屑として穴より出づる風
揮霍見日雪　　揮霍として日を見る雪
颼颼無久搖　　颼颼として久しくは揺るること無く
皎皎幾時潔　　皎皎として幾時か潔からん
未覺泮春冰　　未だ春冰の泮くるを覚らざるに
已復謝秋節　　已に復た秋節に謝す
空對尺素遷　　空しく尺素（表）の遷るに対し
獨視寸陰滅　　独り寸陰の滅するを視る
否桑未易繫　　否桑未だ繫くるに易からず
泰茅難重拔　　泰茅重ねては抜き難し
桑茅迭生運　　桑と茅と迭いに運を生ず
語默寄前哲　　語と默と前哲に寄せん

右の一首全十二句は、各四句ずつの三段落に分かれる。第一段落、穴から出る騷屑として鳴る風、また、日光に

照らされ瞬時に揮霍として消えてゆく雪、颼颼たるつむじ風の音もやんで木々を揺るがしつづけることなく、また、皎々たる降雪もいつまでも潔白ではありえないという。騒屑・颼颼は、風の音。揮霍は、速やかなさま。

第二段落、春となり氷が融けたことも気付かぬ中に、はや秋が去ろうとする。日時計の時を刻む日影が遷り、一刻一刻が失われるのをただなすすべもなく見守る。「尺素」は、尺表の誤りという。この段落は、季節、時の推移の速さに対する無力感をいう。

第三段落、『易』の否卦の九五の爻辞に「休否。大人吉。其亡其亡、繫于苞桑。」（否を休む。大人は吉。其れ亡びん其れ亡びんとて、苞桑に繋る）といい、また否卦の反対卦である泰卦の初九の爻辞に「拔茅茹。以其彙。征吉」（茅を抜くに茹たり、其の彙と以にす。征けば吉）という、この二つの爻辞に表される事態が実現し難い世の中であることをいい、否と泰すなわち閉塞と開通の相反する二つの運命の交代するのが世の習いであってみれば、昔の哲人の遺訓に従い生きることとしようと結んでいる。

一首の大意を以上のように捉えたが、さてそこで第二句「揮霍見日雪」について、管見の限りであるが、従来の諸注釈の指摘していない何かの典拠があるのではないかということと、その典拠と第九・十句に言及する「易」の否・泰の卦とを結ぶ一文が『漢書』中に存することが判明した。以下それについて説明し、一首の解釈とどのような関連が考えられるのかを検討したい。

ところで右に述べた従来の諸注釈とは、次の四種である。刊行年の順に列挙する。

①黄節註『謝康樂詩註』（一九二四年の序あり。藝文印書館　一九六六年十二月）

②顧紹柏注『謝霊運集校注』（中州古籍出版社　一九八七年八月）

③李運富編注『謝霊運集』（岳麓書社　一九九八年八月）

④森野繁夫訳注『謝康楽詩集　巻下』（白帝社　平成六年十月）

以下、その書を示すのに当該の訳注・編注者の姓を略称として用いた。

「折楊柳行」（二首）其二の第一句「出穴風」という語の典拠として、上述の諸注釈はみな宋玉「風の賦」の「空穴來風」（空穴は風を来す）の句を挙げている。まずこれについて述べてみたい。

宋玉が楚の襄王の問いに、「臣 師に聞けり、枳句 巣を来し、空穴 風を来す」と対えた「空穴」は、李周翰が「空

穴は門戸の穴を謂う、門戸の穴には、風多く従う也」と注するように、風が生まれる巣のようなものであって、詩中にいうように「騷屑」と風声を発するにあたいするものではないようである。むしろこの後の文で宋玉が、「夫れ風は地より生じ、青蘋の末より起こり谿谷に侵淫し、土囊の口に盛怒し、（云々）」という、その「土囊之口」のほうがふさわしく感じられる。李善の注に「土囊は大穴なり。盛弘之『荊州記』に、〈宜都の佷山県に山有り、大なること数尺、風井と為す〉と。土囊は当に此の類なるべし」という。第四句の「無久搖」の表現からすると、この風は長く木々を揺るがすことなく終息するのだと解せられる。『漢書』五行志・第七下之上に「京房易伝に曰く、政悖り徳隠る、茲れを乱と謂う、厥の風は先に風ふきて雨ふらず、大風暴に起きて、屋を発し木を折る」とあるような災異の象徴としてのものではないだろうか。『宋書』五行志五には「宋の少帝の景平二年正月癸亥朔旦、暴風殿庭に発し会席翻揚すること数十丈。五月、帝廃さる」とある。この場合ならば、「出穴風」は宮殿の門戸の穴から出る風と解することができよう。これについてはまた後に触れたい。

ところで第二句「見日雪」の語については、いずれの注釈書もその典拠を挙げることがない。ただみな「揮霍」の語について、陸機「時に感ずる賦」に「敷層雲之葳蕤、墜零雪之揮霍」（層雲の葳蕤たるを敷き、零雪の揮霍たるを墜らす）の句を典拠とするのであるが、これはあくまで「揮霍」についてであって、「雪」についてでないことはいうまでもない。それでは、「見日雪」の典拠としては何がふさわしいか。

『詩経』小雅、魚藻之什「角弓」の詩は、その毛序に「角弓、父兄刺幽王也。不親九族而好讒佞、骨肉相怨。故作是詩也」（父兄 幽王を刺るなり。九族を親しまずして、讒佞を好み、骨肉相怨む。故に是の詩を作るなり）というが、その第七章を次に掲げる。

雨雪瀌瀌　雪雨ること瀌瀌たれども
見晛曰消　晛を見れば曰に消ゆ
莫肯下遺　肯えて下遺し
式居婁驕　式て居て驕を婁むる莫し

右の一章前半の二句について、毛伝は、「晛、日氣也」（晛は、日の気なり）という。また、鄭箋は、「雨雪之盛、瀌瀌然、至日將出、其氣始見、人則皆稱曰、雪今消釋矣。喻小人雖多、王若欲興善政、則天下聞之、莫不曰小人今誅滅矣。其所以然者、人心皆樂善、王不啓教之」（雪雨ること之れ盛んにして瀌瀌然たれども、日の将に出でんとし、

其の気始めて見ゆるに至るや、人則ち称して曰く、雪は今消釈せん、と。小人多しと雖も、王若し善政を興さんと欲すれば、則ち天下之を聞き、小人今誅滅すと曰ざるは莫きに喩う。其の然る所以は、人心は皆善を楽むに、王之を啓教せざればなり）と説明する。

また後半の二句について、鄭箋は「莫、無也。遺、讀曰隨。式、用也。婁、斂也。今王不以善政、啓小人之心、則無肯謙虚、以禮相卑下、先人而後己、用此自居處、斂其驕慢之過者」（莫は、無なり。遺は読んで随と曰う。式は、用なり。婁は、斂なり。今 王善政を以て、小人の心を啓せずんば、則ち肯えて謙虚にして、礼を以て相卑下し、人を先にして己を後にし、此を用って自ら居処し、其の驕慢の過ぐるを斂むる者無し）と説くのである。

毛伝・鄭箋の解釈に従えば、第七章の大意は、雪が盛んに降っても、日の光に逢うと消えてしまう。そのように小人の勢いが盛んでも、王が善政を興すことを掲げて導くならば、小人も驕慢の心をおさめ謙虚になって従うだろう。その際、王はその骨肉の人々と親しみ彼等の協力を利用すべきだ、と主張するようである。

これによれば、雪は君側の小人、晛（日の光）は王の善なる威光の譬えということになるだろう。ところでこの日光に逢って消える雪の譬えが、「折楊柳行」の詩の第三段落に語る『易』の否・泰の卦と相結んで表出されている一文がある。次に章をかえてそれについて述べたい。

二

『漢書』巻三十六「楚元王伝」に記載する「劉向伝」に、向（当時は本名の更生といった）が封事を上奏したことを載せている。その間の経緯を概略しるすと次のようである。

元帝即位のはじめ、太傅蕭望之が前将軍となり、少傅周堪が諸吏光禄大夫となり、ともに尚書の事をつかさどり、甚だ尊任された。二人は更生を重んじ、薦めて散騎宗正給事中に抜擢し、侍中金敞とともに、四人で輔政に当たったが、当時外戚の許氏・史氏の一族の放縦と宦官弘恭・石顕の弄権に苦しんだ。望之・堪・更生は彼等の罷免を建議しようとしたが、ことが洩れ逆に讒訴され、堪と更生は獄に下り、望之らも官を免ぜられた。その年の春、地震があり、夏に客星が現れる災異があり、これに感悟した帝は詔を下し、望之に爵関内侯、奉朝請を賜り、秋、堪・更生を諫大夫にしようとしたが、恭・顕が口をはさんでみな中郎にとどまった。冬、また地震があった。更生は母方の親戚に異変を上奏させた。これが向の伝に記載する最初の上奏の文

である。

その中で次のようにいう、「前弘恭奏望之等獄決。三月、地大震。恭移病出、後復視事、天陰雨雪。由是言之、地動殆爲恭等」（前に弘恭は望之等の獄を奏して決す。三月、地大いに震う。恭は移して病もて出でて、後復た事を視るに、天陰り雪雨る。是に由り之を言えば、地の動くは殆ど恭等の為なり）と。地震降雪の天変地異は、恭等の悪行の招いたものだと主張したのである。

書が奏されると、恭・顕は更生のしわざと疑い、取り調べの結果、更生が罪を認めたので、誣罔・不道の罪により庶民とされた。望之も前事の無実であることをその子に上書させたことで罪となり、自殺した。帝はこれをはなはだ後悔し、堪を光禄勳に抜擢し、またその甥の張猛を光禄大夫給事中とし、二人は大いに信任された。恭・顕はこれを憚り、しばしば讒言し譏った。更生は堪・猛が位につき、自分も再び進まんことを願い、それを覆されるのを懼れて、封事を上奏した。これが二度目の上奏文である。

舜や周の文王・武王の時代、多くの賢人が朝廷に和合すれば、万物が野に和合し、瑞祥が現れ、王者の徳を寿ぐ『詩』が詠われた。時代が下って厲王・幽王の際には、朝廷が和合せず、骨肉が相怨み誹り、詩人がこれをにくみ憂い、例えば「民之無良、相怨一方」（民の良無き、一方に相怨む）（「角弓」第四章）と詠ったのだった。このように小人が跋扈し、朝政をないがしろにすると、『詩』に刺譏され、また「天變見於上、地變動於下、水泉沸騰、山谷易處」（天変 上に見われ、地変 下に動き、水泉沸騰し、山谷処を易う）というように、災異に現れる。これ以後、天下は大いに乱れ、諸侯は背き朝せず、周室は衰微した。隠公元年から哀公十四年の獲麟に至るまで、二百四十二年の間に、日蝕が三十六回、地震が五回、山陵の崩壊が二回あり、彗星が三度現れるなどをはじめとして、さまざまな災異・災害が起こり、これに応じてその都度禍乱が起こったことをいう。そして、このような事態を招いた原因について次のようにいう。

原其所以然者、讒邪並進也。讒邪之所以並進者、由上多疑心。既已用賢人而行善政、如或譖之、則賢人退而善政還。夫執狐疑之心者、來讒賊之口、持不斷之意者、開羣枉之門。讒邪進則衆賢退、羣枉盛則正士消。故易有否泰。小人道長、君子道消。君子道消、則政日亂、故爲否。否者、閉而亂也。君子道長、小人道消、小人道消、則政日治、故爲泰。泰者、通而治也。詩又云「雨雪麃麃、見晛聿消」與易同義。（略）

故治亂榮辱之端、在所信任、信任既賢、在於堅固而不移。詩云「我心匪石、不可轉也」（略）

故賢人在上位、則引其類而聚之於朝、易曰「飛龍在天、大人聚也」在下位、則思與其類俱進、易曰「拔茅茹、以其彙、征吉」在上則引其類、在下則推其類、故湯用伊尹、不仁者遠、而衆賢至、類相致也。

（其の然る所以を原ぬれば、讒邪並び進めばなり。讒邪の並び進む所以は、上に疑心多きに由る。既已に賢人を用いて善政を行うに、如し之を譖ること或れば、則ち賢人退いて善政還える。夫れ狐疑の心を執れば、讒賊の口を来し、不断の意を持てば、羣枉の門を開く。讒邪進めば則ち衆賢退き、羣枉盛んなれば則ち正士消す。故に易に否泰有り。小人の道長ずれば、君子の道消す。君子の道消すれば、則ち政日に乱る、故に否と為す。否とは、閉じて乱るるなり。君子の道長ずれば、小人の道消す、小人の道消すれば、則ち政日に治まる、故に泰と為すなり。泰とは、通じて治まるなり。『詩』に又云う「雪雨ること麃麃たれども、晛を見れば聿に消ゆ」と、(2)『易』と義を同じうす。）（略）

（故に治乱栄辱の端は、信任する所に在り、信任するもの既に賢ならば、堅固にして移らざるに在り。『詩』に云う「我が心石に匪ず、轉ず可からず」と。）（略）

（故に賢人上位に在れば、則ち其の類を引いて之を朝に聚む、『易』に曰く「飛龍天に在りとは、大人聚まるなり」と。下位に在れば、則ち其の類と俱に進まんと思う、『易』に曰く、「茅を抜くに茹たり、其の彙と以にす、征けば吉」と。上に在れば則ち其の類を引き、下に在れば則ち其の類を推す。故に湯は伊尹を用い、不仁者遠ざかり、而して衆賢至る、類相致すなり。）

右の劉向の封事の文が明らかにしていることは、小人が跋扈して君子がその徳を発揮することができない時は、『易』の否の卦に象徴される閉ざされた乱世となり、逆に君子が同心協力して善政を目指し小人を退ける時は、泰の卦に象徴される通じて治まる世となる。その治世を実現するには、天子が君子を信任してその善なる力を発揮させ、小人を退けること、それには天子がひとたび信任したうえは堅固にして移らざる態度を必須とする。小人がいかに多くとも、盛んな降雪が日差しを見ればたちまちに消えるように、天子の威光により小人たちは消滅するのである。治世を支えるためには、君子が立派な人士を抜擢し、また推薦して、善政の実現を図らねばならない。それが『易』の泰の卦の「茅を抜くに茹たり、云々」の意味するところである。

そしてこの封事の文の内容が、謝霊運の「折楊柳行」其二のそれにほぼ一致することを私たちは確認することができる。あるいは「折楊柳行」其二の作者は、劉向の封事の文を一種の典拠としてこの作を書いたのではないだろうか。

謝霊運は後述の「撰征の賦」に彭城に関する故事をしるす中で、一段落（二十四句）を漢の楚の元王とその子孫の言及に当て、劉向・劉歆父子について「政（向の字子政）は言を直くして以て心を安んじ、駿（歆の字子駿）は才を絶ちて以て己を喪ふ」という。おそらくは劉向の封事の文を知っていたであろう。それでは、もしそれを典拠のようにして「折楊柳行」を書いたとするならば、いったいどのような意味をそこにこめたのであろうか。

三

ここで「折楊柳行」の表現に再度検討を加えたい。

第三段落の「否桑」と「泰茅」の語および否・泰の卦について、他の霊運の詩文および『宋書』武帝紀の用例を見ると、次のようである。

義熙十二年（四一六）八月、劉裕は北伐を再開、翌年の仲冬、霊運は勅命により、劉裕を慰問するため彭城に赴く。その旅の見聞・感慨を綴ったのが「撰征の賦」である。その序の後半部に、亡き祖父の謝玄が淮・徐の地方の長官となり、前秦苻堅の大軍に淝水の戦において大勝し、風前の灯火同然の東晋の命運を救った確固たる功績を讃えて次のようにいう、

「以仲冬就行、分春反命。塗經九守、路踰千里。沿江亂淮、遡薄泗汳、詳觀城邑、周覧丘墳。眷言古迹、其懐已多。昔皇祖作藩、受命淮徐、道固苞桑、勳由仁積」（仲冬を以て行に就き、分春に反命す。塗は九守を経、路は千里を踰ゆ。江に沿い淮を乱り、遡りて泗・汳に薄り、詳かに城邑を観、周く丘墳を覧る。古迹を眷りみ言いて、其の懐い已に多し。昔 皇祖 藩と作り、命を淮・徐に受け、道は苞桑より固く、勳は仁積に由る）と。

この「苞桑」は、前述した『易』の否卦・九五の爻辞「否を休む。大人は吉。其れ亡びん其れ亡びんとて、苞桑に繋る」にいう「桑の木の根」、すなわち揺るぎない堅固な根本の譬喩であって、「否桑」というのと同じである。因みにこの語の使用は『宋書』武帝紀（中）にも確認することができる。すなわち上述の劉裕の北伐において、洛陽を陥落させ、晋の五陵を修復した際、安帝が劉裕の功績を讃えて、位を相国に進め、揚州の牧、宋公とし、九錫を授与する策書に、「公有康宇内之勳、重之以明德。爰初發迹、則

奇謨冠古、電擊強妖、則鋒無前對、聿寧東畿、大造黔首。若乃草昧經倫、化融於歳計、扶危靜亂、道固於苞桑。」（公宇内を康らかにする勲有り、之に重ぬるに明徳を以てす。爰に初めて迹を発しては、則ち奇謨古に冠たり、強妖を電撃しては、則ち鋒に前み対するもの無く、聿に東畿を寧んじ、大いに黔首に造す。乃ち草昧の経綸の若きは、化は歳計より融らかに、危を扶け乱を静め、道は苞桑より固し）と述べている。

さらにまた、否の卦に関して説明すると、その彖伝に、「内陰而外陽、内柔而外剛、内小人而外君子。小人道長、君子道消也。」（内陰にして外陽なり。内柔にして外剛なり。内小人にして外君子なり。小人、道長じ、君子、道消するなり）という。すなわちこの卦は、内三爻が陰、外三爻が陽で、内の陰柔で外の陽剛を防ぐことを示し、小人が朝廷内にあって親しまれ、君子が外にあって疎んじられることを示し、いずれも閉塞する運命にあることを表す。またこの卦は十二消息卦の一つで、七月に配当し、陰が漸く長じ（伸び）、陽が次第に消する（ちぢまる）過程を示す。小人が日々に勢いを得、君子が日々勢いを失っていくなりゆきを表す。霊運の「祖徳を述ぶる詩」の序に、「太元中、王父龕定淮南、負荷世業、尊主隆人、逮賢相徂謝、君子道消、拂衣蕃岳、考卜東山」（太元中、王父は淮南を龕定し、世業を負荷し、主を尊び人を隆んにす。賢相の徂謝し、君子の道消するに逮び、衣を蕃岳に払い、卜を東山に考う）といい、祖父謝玄が宰相謝安亡きあと、小人たちの跳梁する中央を去って郷里の一地方官となったことを、また「廬陵王の墓下の作」に「眷言懐君子、沈痛結中腸、道消結憤懣、運開申悲涼」（眷みて言に君子を懐い、沈痛は中腸に結ぶ。道消して憤懣を結ぶも、運開けて悲涼を申ぶ）といい、宋の朝廷が徐羨之らにより少帝は廃位、のち殺害、廬陵王劉義真も庶人に降格、のち殺害されたことを「道消して」といい、のち文帝によりその名誉が回復されたことを、「運開けて」といったのである。

次に「泰茅」の語の用例であるが、「曇隆法師の誄」の冒頭にそれを見ることができる。「仰尋形識、俯探理類。探聲知律、拔茅觀彙。物以靈異、人以智貴。即是神明、觀鑒意謂」（仰いで形識を尋ね、俯して理類を探る。声を採りて律を知り、茅を抜いて彙を観る。物は霊を以て異に、人は智を以て貴し。即ち是れ神明にして、意謂を観鑑す）と。

すなわち、人は形状や標識を認識し、道理や法則を探る、たとえば自然界の音声から音律を感得し、茅を引き抜いて

その根に繋がる同類を観察するというようなものだ、万物はその霊能により不思議な力を表すのに対し、人は智恵により貴いのだ、つまり精神の働きにより、万物の精髄を鑑別するのであるという。ここでいう「抜茅」とは、人が万物の霊性を察知する智力を意味するようで、「折楊柳行」のそれとは直接の関連はなさそうである。

さて、問題はこの二語を用いた「否桑は未だ繋くるに易からず、泰茅も重ねては抜き難し」の対句の深意をどう汲み取るかということである。王弼注・孔穎達正義を基にしつつ解釈すれば、上の句は、否卦九五の尊位に居る大人、即ち天子のみが否（＝閉塞）の気運を休息させ泰平を取り戻すことができるのだが、君子の道が消する険難な時に居るので、心中つねに危機を意識して戒慎し続けることが自らの安全を確保する（＝苞桑に繋く）道だ。[3] しかし、その道をとることはまだ容易ではない、という。また、下の句は、泰の内卦乾（☰）において、初九（庶人の位）は九二（士の位）・九三（大夫の位）とともに構成する三陽爻のグループ（類）の首位であり、初九が上卦（外卦）に挙がろうとすると他の九二・九三の二爻も同調して挙がろうとする。それは恰も茅を抜こうとすると、根が繋がっていてその同類も一緒に抜けてくる（＝抜茅茹、以其彙）ようなものだ。そして外卦坤（☷）は柔順にこれに応じ、拒もうとしないので三陽はみな志を得るのである。以上が泰の初九の爻辞と小象の内容のあらましである。[4] 詩の下の句は上述のように、かつて下級人士の同志による行動に支配層が応じて上下相協和する盛世を現出したことがあったが、それも再びは実現し難いと歎ずるものであろう。

次に詩の末尾「語默寄前哲」について、上述の諸注釈の指摘を見ることとしよう。「語默」は、各書みな『易』繋辞伝上「（孔）子曰、君子之道、或出或處、或默或語。二人同心、其利斷金。同心之言、其臭如蘭」（子曰く、君子の道は、或いは出で或いは処り、或いは黙し或いは語る。二人心を同じくすれば、其の利なること金を断つ。同心の言は、其の臭（かお）り蘭の如し）を典拠とする。黄節・李・森野はこれに陶淵明「命子」詩の「時有語默、運因隆窊」（時に語と黙と有り、運は隆と窊（わ）に因る）の句を示す。「前哲」の語について森野は次のように詳説する。

「前哲」は、前代の賢人、哲人。「山居の賦」に「前哲の遺訓を仰ぎ、性情の便とする所に俯す」（昔の哲人の遺（のこ）された訓（おし）へを仰ぎ慕い、我が性情の便とする所に従ふ）とあり、その自注に「此の山に経始し、訓へを後に遺すを謂ふなり。性情は各々便とする所有り、山居は是れ其

の宜しきなり。『易』に云ふ、晦に向かひて入りて宴息すと。荘周云ふ、自ら其の心に事ふと。此の二は是れ其の処する所なり」とある。「山居の賦」における「前哲」は、霊運の祖父である謝玄を指しているが、その謝玄の生き方は「祖徳を述ぶる」詩に言うように出処進退をわきまえたものであった。つまり「前哲」とは『荘子』や『易』の作者ら、更には『荘子』『易』に基づいて出処進退をわきまえていた人物を指すようである、と。(5)

四

謝霊運の楽府の作が多く晋の陸機（二六一～三〇三）のそれと同題で、陸詩を模擬しているというのは周知の通りである。上述のように「折楊柳行」も陸機に同題の作一首がある。左に掲げて、謝詩との関連を検討したい。

折楊柳行　　陸機

邈矣垂天景　　邈たり　垂天の景
壯哉奮地雷　　壯なるかな　地に奮う雷
隆隆豈久響　　隆隆たるも　豈に久しく響かん
華光恒西隤　　華光も　恒に西に隤る
日落似有竟　　日の落つるや　竟り有るに似たり
時逝恒若催　　時の逝くや　恒に催さるるが若し
仰悲朗月運　　仰いでは朗月の運るを悲しみ
坐觀璇蓋回　　坐しては璇蓋の回るを観る
盛門無再入　　盛門には　再び入る無く
衰房莫苦開　　衰房　苦だは開く莫し
人生固已短　　人生　固より已に短く
出處鮮爲諧　　出処　為に諧うこと鮮し
慷慨惟昔人　　慷慨して昔人を惟い
興此千載懷　　此の千載の懷を興す
升龍悲絶處　　升龍　絶処を悲しみ
葛藟變條枚　　葛藟　條枚を変ず
寤寐豈虛歎　　寤寐　豈に虛しく歎かんや
曾是感與摧　　曾ち是れ　感みと摧きと
弭意無足歡　　意を弭んぜんとするも　歡ぶに足る無し
願言有餘哀　　願いて言に　余哀有り

第一段落（1～6）は、陽光も雷鳴も終息の時が来ることをいう。これは帝王にも死の訪れがあることを譬喩したものであろう。

第二段落（7～10）は、めぐる朗月と星座を載せて回転する天空、その夜景を観察して悲哀することをいうが、悲哀のゆえんは盛門がたちまち衰房に変わる世の無常に感じてであろう。郝立権は『老子』第五十八章「禍や福の倚る

所、福や禍の伏する所」の句を引いて、「盛衰常無く、吉凶域を同じくす、今の盛門は、将来の衰房なり。詩の意に深感有り」と指摘する[6]。朗月に象徴される夜景は、帝王の死に伴う権力の交替を意味するものか。

第三段落（11～14）は、以上に述べたような、変転する世事に対処するには人生はまことに短い、この昔人の感慨をあらためて同感することをいう。

第四段落（15～20）の最初の句は、黄帝が首山の銅を採り鼎を完成した後、迎えに来た龍に騎って昇天した時、従い上ることができなかった小臣や百姓が号泣した伝説（『史記』封禪書）、漢の張衡はそれを「升龍を鼎湖に想う」（「西京の賦」）と述べいる。また、次の句は、「莫莫たる葛藟は、條枚に施えり」（『詩経』大雅・旱麓）に拠り、葛や藟（くずた）の蔓草が、そのまといつく木の枝や幹を変えることをいう。あわせて帝王の死により、権臣たちがその依附する相手を変えることを譬喩したものであろう。あとの四句は、こうした権力をめぐる醜態に対する憂傷の想いを述べたものである。

郝立権は、「詩の作、其れ趙王倫の簒位の事に感じたるか。晋書・恵帝紀、永寧元年春乙丑、趙王倫帝位を簒い、帝を金庸城に遷し、号して太上皇と曰う」という。

謝霊運の作は、雪と風の天象を以て始め、時の速やかな経過を述べ、時世の険難に処するに前哲の教えに従うことをいって結ぶ。構成において陸機の作を模擬しているのは確かなことと思う。しかし、冒頭四句、そのうちの「出穴風」は少帝の弑虐を暗示する表現かと思うが、ことに日を見る雪が「皎々として幾時か潔からん」とする表現をみると、天子（＝日）の威光により消する、この「角弓」の鄭箋や劉向の封事の文に所謂小人（＝雪）なる者が、実は潔白の人として作者が惜しんでいた存在ではないかと思うのである。それが誰かとあえて穿鑿するならば、霊運の族弟謝晦ではなかろうか。

謝晦（三九〇～四二六）は、劉裕に仕え、その帝位に即くに及んで中領軍に遷り、佐命の功により武昌県公に封じられ、少帝の時、徐羨之・傅亮とともに輔政の任に当たったが、その後少帝を廃した。そして文帝の即位後、弑逆の罪に問われ、挙兵したが檀道済のために破られ、誅された。挙兵の際の檄文の一節に、「若し小人をして志を得しめば、君子の道消し、凡百 殄瘁の哀しみ有り、蒼生 横流の懼れを深くせん」といい、また、囚われて都に檻送される路に作った騒体の長編「人道を悲しむ」の一節に、「国既に危うくして重ねて構え、家已に衰えて載び（ふたた）昌んなり。顛れん（たお）

とするを扶けて否を休むを獲、世道の方に康からんことを冀う」という。『宋書』の本伝に、「晦は風姿美にして、善く言笑し、眉目分明、鬢髪漆を点ずるが如し。文義を渉猟して、朗贍多通なり。高祖深く愛賞を加え、羣僚及ぶもの莫し」とある。

『宋書』謝弘微伝に、謝混がその烏衣巷の居に一族の子弟、霊運・瞻・曜・弘微らを集め、文義を以て賞会し、つねにともに宴処した。これを「烏衣の遊」といい、混の五言詩に「昔烏衣の遊びを為すに、戚戚として皆親姪なり」と詠っているのである。

少帝の廃位弑虐をめぐる文帝と晦・徐羨之・傅亮ら側近の輔政グループとの力関係の変化、また晦と霊運との高祖裒をおなじくする族兄弟として睦み合った特別な間柄をあわせ考えるならば、「折楊柳行」其二の冒頭四句が、文帝により叛逆の罪を問われた晦の運命を悼む表現ではないかと推測するのである。

以上の検討を通して、謝霊運の「折楊柳行」（二首）其二は、次に述べるような内容の作といえるのではないだろうか。

すなわち、第一段落（1～4）は、降り積む雪が日差しを見れば忽ちに融け、穴から出たつむじ風がやがて鎮静する。しかし、消えてしまった雪の皎々たる潔白のさまを忘れかね、今は木を揺るがすこともない風のかつての颼颼たる音が耳について離れないのだ。

第二段落（5～8）は、氷が融けて春が来たのを覚らないうちに、はや秋が去っていくというように、ただ空しく日時計の指針の影の遷るのを見つめ、貴重な時の消失を嘆くばかりだ、と閉塞したままの世の情況を打開することができず、今まで無為の時間を過ごしてきたことをいう。

第三段落（9～12）は、『易』の否の卦九五の爻辞「苞桑に繫る」とあるように、天子が国家の安全を固く心に戒慎する道もまだ見出し得ず、また泰の卦初九の爻辞「茅を抜くに茹たり、其の彙と以にす」とあるように、上の者はすぐれた人材を抜擢し、下の者もすぐれた仲間を推薦し、かくて上下相呼応、相協力するというようなこともかつてはあったが、重ねては実現し難い。このように否と泰との運が交互に生滅するのが世の習わしであれば、出処進退は先人のそれに従い、隠遁しようという。

作者が「否桑」の語で暗示しているのは、祖父謝玄が前秦の大軍を破ったようなこと、「前哲」も謝玄のイメージが濃厚である。また、「泰茅」は、この詩中からは読み取ることができないが、「重ねては抜き難し」というのだから、

かつてそのような前例があったことをいうものと推測することができる。とすれば、それは安帝の元興三年（四〇四）、劉裕が同志と相計らって、簒奪者桓玄を打倒し尋陽に幽閉されていた安帝を救出し、晋朝興復を実現したようなことを指すのではないかと思う。

おそらくこの詩の背景には、少帝を廃し、弑虐の罪に問われて刑場の露と消えた謝晦を悼み、また、謝晦を罪に問うて死を与えた文帝とその側近に対する非難の意があるのではなかろうか。陸機・謝霊運の「折楊柳行」は、ともに死者への哀悼を通じて、人生の短促と出処の困難を嘆じた歌といえよう。

謝霊運は、東晋王朝を支えた謝安・謝玄の後継者と期待され、その官界における足跡も、琅邪王司馬徳文（後の恭帝）に出仕したのに始まり、劉裕のライバル劉毅に八年間仕え、その劉毅が劉裕に殺された後、劉裕に仕え、その後劉裕の第二子廬陵王劉義真に顔延之とともに近づくなど、起伏に富むものだった。彼は祖先の謝安や謝玄のように、政治的手腕を発揮し、謝家の代表としての声名を求めたようだが、朝廷（文帝）の評価はその文章学問の実力を賞するにとどまった。不満を抱いた霊運は出仕せず、やがて故郷始寧に帰り、遊娯宴集に熱中し、咎められて免官となる。以後五年の運命は下降の一途をたどってついに棄市の刑に処せられる。

「折揚柳行」其二の作が、もし劉向の封事の文を意識して書いたものとすると、その「治乱栄辱の端は、信任する所に在り、信任するもの既に賢なれば、堅固にして移らざるに有り」、すなわち天子がその信任する賢者に対し堅固不動の信頼の心をもち続けることが必須であることを暗示しているであろう。「我が心　石に匪ず、転ず可からざるなり」（詩経・邶風・柏舟）。ここに作者のこの作にひそめた天子（文帝）への批判をみることができるように思う。

注

（1）逯欽立輯校『先秦漢魏晋南北朝詩』（中）宋詩巻二・謝霊運・楽府、折楊柳行に「原二首。按第一首鬱鬱河邉樹。乃魏文帝詞。今刪」という。

（2）劉向は魯詩を学んだので、その引く詩も毛詩と異文の場合がある。「陳喬樅・魯詩遺説攷序」に「劉向父子世習魯詩」（王先謙『詩三家義集疏』序例）という。

（3）『易』否卦・［九五休否大人吉其亡其亡繫于苞桑］王弼注「尊に居りて位を得、能く否道を休む者なり。否を小人に施すは、否の休むなり。唯大人にして後能く然るのみ。故に曰く、大

人は吉なりと。君子の道消するの時に処り、己尊位に居れば、何ぞ以て安んず可けんや、故に心将に危ならんとするに存せば、乃ち固きを得るなり」

(4)『易』泰卦・[初九拔茅茹以其彙征吉]王弼注「茅の物為るや、其の根を抜けば相牽引する者なり。茹は、相牽引するの貌なり。三陽志を同じくし、倶に志外に在り。初は類の首為り、已に挙がれば則ち従うこと、茅の茹たるが若きなり。上順にして応じ、違距を為さず。進んで皆志を得。故に其の類と以にして、征けば吉なり。[象曰拔茅征吉志在外]正義曰「志外に在りとは、茅を抜く、征けば吉なりの義を釈するなり。其の三陽の志意皆外に在るを以て、已に行けば則ち従って茅を抜く似たり。征行して吉を得。此れ外物に仮りて以て義を明らかにするなり」

(5) 森野繁夫『謝康樂詩集』巻下一一四・一一五ページ。

(6) 郝立権『陸士衡詩註』(一九三〇年五月の自序あり。人民文学出版社 一九五八年・北京)

【参考文献】

○高田真治『詩経』(下)(漢詩大系2 集英社 一九九六年)
○本田済『易』(新訂中国古典選1 朝日新聞社 昭和四十一年)
○今井宇三郎『易経』上(新釈漢文大系 明治書院 昭和六十二年)
○黄節『謝康楽詩註』(藝文印書館 一九六六年)
○顧紹柏注『謝霊運集校注』(中州古跡出版社 一九八七年)
○李富運『謝霊運集』(岳麓書社 一九九八年)
○森野繁夫『謝康樂詩集』巻下(白帝社 平成六年)
○森野繁夫『謝霊運論集』(白帝社 二〇〇七年)
○藤井守「謝霊運の楽府詩」(日本中国学会報 第二十七集、日本中国学会 一九七五年)

追記

拙稿を提出後に曹道衡「從兩首《折楊柳行》看兩晉間文人心態的變化」(『漢魏六朝文學論文集』廣西師範大學出版社 一九九九年)に謝霊運「折楊柳行」の冒頭四句の典拠について、すでに以下に示すような指摘がなされていることを知った。すなわち「謝霊運在遣辞造句方面、也和陸機一様、頗好使用〈経書〉和〈子書〉中的典故。例如此詩開首四句、以風雪起興、前者即取《老子》第二十三章的『飄風不終朝』後者即取《詩経・小雅・角弓》的『雨雪瀌瀌、見晛(日)曰消。云々』と。この指摘を見落としていた不明を恥じる。ただし拙稿の場合、劉向の封事の文を一種の典拠としたものではないかと考えており、こうした見方にもあるいは意味があろうかと考え、敢えて公表することとした。

(文教大学名誉教授)